



前稿で述べたように、人間科学は、諸科学の成果にもとづいて「人間とは何か」という本質的な問いをたえず問いかげながら、人間とその環境との変化にかかわろうとする、基本的に学際的な分野として規定される。それでは人間科学にはいかなる要素が必要であろうか。

人間は多面的・複合的存在であるから、この人間を対象とする人間科学は、当然ながら、人間に対して多面的・複合的に接近しなければならぬ。ところがここで、人間科学の方法を単純に自然科学的なものと見なすとすれば、人間の現実的な形態と本質を把握するうえでただちに限界に直面することになる。

人間は決して例えば顕微鏡下の被験物と同一の客観的事物ではなく、観察者と相互作用しうる対他存在だからであり、人間存在がそもそも一回性・歴史性・不可逆性を本質とするからである。自然科学的方法は理想的なモデルであるとしても、そこには限界があるからこそ、この限界を「方法的多元主義」によって補う必要がある。これは、すべての人文科学・社会科学・自然科学の成果と方法に対して開かれた立場にほかならない。人間に對するそれぞれの分野のアプローチ

1. ちの意義と限界を認め合い、自然科学的方法を唯一可能な方法として限定するのではなく、あらゆる方法を総動員して人間の本性に迫ること。こうした方法論的態度こそが人間科学の出発点でなければならぬ。

ところでこの方法論的立場は、人間科学が基本的に学際的な領域であることを意味する。ここから直接に要請されるのは、人間研究にかかわる、近接する学問領域どうしの対話と相互理解である。これは言い換えれば、人間にかんする諸科学の境界領域で生じている諸問題を関係する学問領域どうしが相互に協力し合って解決するというエートスでもある。タコツポからの脱却を必要とするこうした研究姿勢は困難ではあるが、たんに人間科学にとどまらず、きわめて変化の激しい現代社会において常に要請される課題でもある。

こうした要請を実現するためには、人間科学にかかわる研究者には、自分の主たる専門分野のほかに少なくともひとつの副次的な分野をもち、そこで異分野と対話する姿勢をもつことが必要となる。こうした開かれた態度こそが学際性を育む原動力となり、また副次的分野で得られ

る学問的な知見と刺激は主要領域の研究にもプラスをもたらすであろう。重要なことは、アリストテレスが言ったように、こうしたエートス(倫理的生活態度)をエトス(習慣化された性格)に転化することである。人間科学はこういうエトスをもつ多くの研究者が集まる場で、学際的な対話と研究の積み重ねの延長線上に、長期的に形成されるであろう。

もちろん、学際性がただちに人間科学に直結するわけではない。肝要なのは、人間とその環境の改変にかかわる諸問題を具体的に研究し、これを組織化することである。われわれは、人間を具体的な対象として眼前に置かずして抽象的に人間を研究することはできないし、いきなり人間にかんするグランドセオリー(大理論)を作ることもできない。学部学科の人的・物的諸条件に応じて、人間とその環境の改変に直接にかかわる、広すぎずかつ狭すぎることのない、中範囲の理論的テーマを設定し、これを学部学科全体として追求するとともに、この追求を可能にする研究組織を作ることが必要となる。例えば、ヒトの進化、ヒトと大型類人猿との共通性と差異、生命倫理、いじ

め、児童虐待、不登校、人権の抑圧と差別、地域社会の視点からする心の病の予防と解決、少子高齢化社会への対応など、現代社会はこうしたテーマに事欠くことがない。これらの問題からひとつまはいくつかを選択し、その問題の解決のために研究者が分野横断的に共同研究を進めながら、長期的に諸科学どうしの融合をはかっていくことが、さしあたって接近可能な人間科学の方向であろう。

二十一世紀社会では、新しい諸課題に迫られて、既成の分野の消滅、新しい分野の勃興、そして諸分野の共同と融合がますます頻繁に繰り返されるであろう。そうなる必要になるのは、既成の専門分野に埋没して身動きのとれない専門人どうしの寄せ集めではない。こうした時代の変動に有効に対処しうるのは、十分人的・物的保証がなされ、境界領域で生じた諸問題を学際的に研究することを厭わない、訓練を積んだ多数の研究者をそなえた、人間科学のプロジェクトチームであろう。

この意味では人間科学は、その歴史と概念のゆらぎにもかかわらず、二十一世紀の未来を担いうる大きな可能性を秘めているのである。(完)

二十一世紀の人間科学(二)

Okuya Koichi

奥谷 浩一

2008年度入学試験結果

【人間科学科】

Table with columns for years (2004-2008) and applicant numbers (志願者数) and合格者数 (合格者数) for various categories like 一般A, センターA, etc.

【英語英米文学科】

Table with columns for years (2004-2008) and applicant numbers (志願者数) and合格者数 (合格者数) for categories like 一般A, センターA, etc.

【臨床心理学科】

Table with columns for years (2004-2008) and applicant numbers (志願者数) and合格者数 (合格者数) for categories like 一般A, センターA, etc.

【こども発達学科】

Table with columns for years (2004-2008) and applicant numbers (志願者数) and合格者数 (合格者数) for categories like 一般A, センターA, etc.

【大学院臨床心理学研究科】

Table with columns for years (2004-2008) and applicant numbers (志願者数) and合格者数 (合格者数) for categories like 一般, 特別選抜.

二〇〇七年度学位記授与式

第二十八回人文学部卒業生二九六人に学士(人文学)号 第七回大学院臨床心理学研究科修了生十一人に修士(臨床心理学)号

二〇〇七年度学位記授与式が、三月十八日、北海道厚生年金会館ホールで挙行された。二十八回を迎えた人文学部では二九六人(人間科学科一四一人、英語英米文学科六四人、臨床心理学科九一人)に学士(人文学)号が、七回を迎えた大学院臨床心理学研究科では十一人に修士(臨床心理学)号が授与された。全学では学士号授与者九九四人、修士号授与者三二人であった。

総数は、六、三二七人(人間科学科 四、〇五七人、英語英米文学科 一、八五二人、臨床心理学科 四〇八人)となった。また、大学院臨床心理学研究科修了生の総数は、七〇人となった。

二〇〇七年度

臨床心理士資格試験合格者

日本臨床心理士資格認定協会による、二〇〇七年度の資格審査は、一次試験(筆記試験)十月六日(土)、二次試験(面接試験)は十一月十日(土)〜十二日(月)に実施され、本研究科修了生は、十一名が合格した。

合格者の氏名は左記に示すとおりで、内二名は過年度の修了生である。今回の受験者は十二名で合格率は九一・七％である。因みに、全国の合格率は六八・九％であり、本研究科が全国と比較して極めて高い合格率を維持していることが理解される。

また、今回全国の合格者は、一、五一九名で、全国の臨床心理士は、一八、二五一名に達する。社会の臨床心理士に対する期待は益々大きくなるものと考えられ、臨床心理士の養成に携わる者の責任の重さを改めて痛感している。(安岡 馨)

合格者名簿

◎臨床心理学研究科修了生

- 猪師由都子・大川 満生
榎本 志保・大橋 恵美
岡村 修一・千葉明日希
沼田亜沙子・畑野美智子
會津(前田) 一実
村井 亮夫・村形 大助

臨床心理学研究科修了生

第七期生修士論文発表会

二〇〇七年度大学院臨床心理学研究科修了予定者十一名の修士論文発表会が、二月二十二日(金)、B101教室で実施された。各人の修士論文のテーマは左記に示すとおりである。研究テーマ、分析手法とも多岐にわたる。ユニークな臨床的研究であり、

第七期生修士論文テーマ

- 相場 史生 「アルコール依存症者の家族が抱える心理的問題とその援助に関する研究」—インタビュー逐語録の分析による四事例の分析—
- 浦田 暁菜 「家族をテーマとするコロージュと家族イメージ法F-I-Tの比較」
- 小川 真紀 「ロールシャッハ・テストにおける図版回転行動の意味」
- 川村 幸大 「大学生の援助行動を規定する要因に関する研究—関連性評定による質的分析と多次元共感性分析による量的分析から—
- 小林美穂子 「職場におけるうつ病の実態とその対策に関する研究」—うつ病の六例の面接調査から—
- 高野 瑠菜 「折り紙コロージュ技法の試み」—高校生と少年院在院者を対象とした基礎的研究—
- 竹内 恵 「セクシャリティにおける悩みと羞恥心に関する基礎研究」—大学生へのアンケート調査とピアエデュケーション経験者へのインタビュー調査を通じて—
- 築田 昌明 「スポーツに対する意識、身体的自己知覚と自尊感情との関連に関する研究」
- 塚田さやか 「夢野久作の病跡」
- 新田 大志 「発達障害児の自己効力感育成の試み」—北海道YMCAの実践から—
- 長谷川典子 「中年後期に脳血管障害を患った男性の心理過程の研究」—受障前後のアイデンティティの連続性とアイデンティティの変容の観点より—

平成二十年度

教員採用候補者
選考の結果について

全国的には、関東・関西圏で小学校教員の採用は、三倍を切るなど、状況の変化が著しいが、本道における中学・

高校教員の採用検査は高倍率が続いているといつてよい。そうしな、来年度に向けた採用検査では本学から四名が登録となった。内二名が、本学部出身者であった。とりわけ高倍率の社会科関係では成果が出なかつたが、中学英語・高校英語で各一名の採用があつた。

とくに、〇六年度人間科学科卒業後、〇七年度英語英米学科で科目等履修生となり英語の免許を取得した廣中未来さんは、そうした長年の計画的な学習の成果として中学英語で採用された。

また、高校英語で採用された杉崎岳君は、九十九年度卒業であり、長年時間講師などで研鑽を積みながら見事栄冠

を勝ち取つた。これらは、英語科教育法の桜田先生、商業科教育法の鈴木先生、教職課程委員の工藤先生が二次試験対策講座を開き、指導に当たつていただいた成果でもある。ここに記して感謝しておきたい。

来年度より、英語英米学科と子ども発達学科双方による副免許取得の機会が、相互に開放されることとなった。五名程度と制限はあるものの、両方の学科にとつて小学校と英語の免許を持つ学生を送り出せることになる。小学校での英語教育活動が設置されることになった新学習指導要領の下で、採用に大いなる武器になると思われる。今後軌道に乗つた時には、その定員拡大が期待されるところである。

今後の教職課程のあり方に直結する免許更新制が〇九年度から実施される予定の今日、どのように魅力ある課程運営を行うかが問われてきている。ぜひ人文学部の諸学科とも連携して改善に努めて行きたい。(富田 充保)

二〇〇七年度
半期海外留学

本学には外国留学制度があり、英語英米学科からは二年生が毎年後期に米英豪の三方国五大学でホームステイしながら学んでいる。昨年度は、本学科から一七名の学生が参加した。米国カリフォルニア大学には四名、英国エクスター大学には六名、豪州モナッシュ大学には七名。昨年度留学生にとつては、円安に原油高という不運な情勢のため渡航費等の負担が例年に比べ増した。しかし、本学には外国留学奨学金制度があり、一定の条件さえ満たせば、二〇万円から四〇万円が返還義務なく援助される。昨年度は十七名中十六名に支給された。経済面だけでなく、学業面でも留学を支援している。通常の講義はもとより、年六回学内で本学学生だけを対象にTOEICやTOEFLを安く受験できる機会を設けている。また、All English Campと題した、教室では味わえない充実した研鑽プログラムを二セコで実施している。今後も、このような支援をうまく活用して、留学前には基礎学力の充実を怠らず、留学中には多くを貪欲に吸収し、それを留学後の人生に生かしてほしい。(山添 秀剛)

二〇〇七年度

卒業論文紹介

人間科学科

社会・福祉領域

本年度、社会・福祉領域では五〇名の学生が卒業論文を提出した。二日にわたって開催された発表会は、「高齢者をめぐる諸問題」「家族をめぐる諸問題」「支援・援助」「ジェンダー・セクシュアリティ」「産業・労働仕事」「文化」「若者・少年」の七つの部会を編成して実施された。それぞれの部会ごとにとりあげられたテーマを紹介することで本領域の傾向と発表会の様子をお伝えしたい。

第一日目「高齢者をめぐる諸問題」では、高齢者および高齢期をめぐる問題をつかかった論文が集められた。定年退職後の移住による田舎暮らしを「プロダクティブ・エイジング」という観点からとりあげた研究「睡眠障害」の実態や「音楽療法実践」についての実証的研究、高齢者にとつての「自立」の意味の探求、さらに「孤独死」「独居死」「介護と殺人」といった現代の社会問題をとりあげた研究が発表された。つづく「家族をめぐる諸問題」では障害者家族をめぐる研究が目立った。「親（母親）の経験そして「きょうだい」の経験に着目した研究に加えて、「児童養護施設」と家族の関係に焦点をあてた研究が紹介された。さらに、母子世帯における「就業支援」「児童虐待」、また、結婚情報誌というメディアにおける「結婚」の表現のされ方を丹念に考察した研究が発表された。「支援・援助」

では「コムスン問題」特別支援教育コーディネーター「障害者の地域生活支援」「聴覚障害者教育」といった問題に加えて、本学バリアフリー委員会の活動実践にもとづく「障がい学生支援」「24時間テレビ」の歴史と今日的意義、インタビュー調査にもとづく「利用者ニーズ」の把握方法についてとりくんだ研究が発表された。「ジェンダー・セクシュアリティ」では、「結婚」と新しい「パートナーシップ」のあり方を考察した研究に加えて、現代社会における「女性のライフコース」「女性自治会長」の可能性、「良妻賢母と母性」の歴史、「中世ヨーロッパにおける魔女狩り」を題材とした女性像とつたように「女性」に焦点をあてた研究が目立った。他方で子どもの「キャラクター選好」を題材にして現代社会のジェンダー構造を探った研究、さらにフィードバックにもとづいて「セクシュアリティ」について考察したセクシュアリティ研究も紹介された。

第二日目の「産業・労働・仕事」では、「リーダースhip論、自動車メーカーのブランド、働く意味、食の安全」についての考察に加えて、雇用政策という観点から日本独自の「高齢者の雇用」のあり方を考察した研究、さらに障害者の「就労」をあつかった二つの研究が紹介された。さまざまなテーマがとりあげられた「文化」で発表された研究は、「ポピュラー音楽」「チャリティーディング」「武士道」「悲しみ」という感情、「サッカイ」「ポルノグラフィ」「海上自衛隊による洋上給油活動」といったようにバラエティに富んだものであった。「若者・少年」でもさまざまなテーマがとりあげられた。「薬物乱用防止教育」「オタク」「若者コミュニティ」「フリースタイル」「若者」を含まない「定職をもたない若者」「少年犯罪」「成人年齢十八歳論」「若者の就職」に加えて、住宅の関わりを切り口にした「現代の親子関係」に関する研究が発表された。文献やデータ、資料に対して誠実にとりくむ姿勢の重要性が再確認された。例年より多い発表者により長丁場となった発表会であったが、それぞれが緊張感をもって臨むことができたのではないかと、毎年ほやいてくるような気もするが、三年生以下の学生たちのより積極的な参加と議論の活発化を期待したい。

心理・教育領域

(木戸 功)

今年度、心理・教育領域では、五ゼミ合わせて五〇名の学生が卒業論文を提出した。以下は、各担当教員による講評である。

小林好和ゼミでは、乳児・幼児期における認知発達、理解の成立や熟達化を含む人間の生涯発達に関する研究が行なわれた。木村美里は「指差し」が発現する乳幼児、母親、さまざまな対象間で成立する「三項関係」を中心に彼らの相互交渉場面を三ヶ月間にわたって観察し、詳細な分析を行なった。庄司智美は、出来事を描いた絵を幼児に提示し、「現実」と「非現実」をいかに識別しているかを検討する実験を行なった。その結果、二歳児では自ら経験したことがなければ「非現実」とする傾向を示し、六歳児ではこの識別が可能であることを見出した。藤田拓也

は、人間の生死に関する知識と「尊厳死」についての意見形成がいかに関わるかを検討し、成人においても「植物状態」「脳死」を明確に分けた理解がみられないこと、また誤った知識を保有しているにもかかわらず、「尊厳死」については賛否を含む意見を強く保持する傾向を明らかにした。また大滝圭介は素人と玄人について、種類の異なる「メロン」や「米」の味覚をいかに評価し、言語的に表現するかを検討し、玄人で比喩表現が多く用いられる等、両者に大きな差異のあることを見出した。

工藤ゼミでは今年度も多様なテーマが選択されたが、教育実践に関連する研究として、宮下卓也「日本語概念を取り入れたテキストが中学生の英語人稱理解に及ぼす効果」が挙げられる。宮下論文は、英作文で頻出する人稱の誤りの背景に、日英語の人称概念の違いがある可能性を指摘し、この点をふまえた教授活動の有効性を検討したものである。外国語を正しく理解するには、母国語に関する知識の参照が重要であることを示した点で興味深い。

鈴木健太郎ゼミでは、人の認識や行動の基盤となる環境について、実際の生活行動の観察・調査をふまえて理解することを目指した。高橋恵子「ジェスチャーと物の関わりについて」、白江香澄「聴覚障がい者のコミュニケーション手段の使用について」、岩間千尋「母子コミュニケーションにおける代弁の機能」など、「他者」とのコミュニケーションの実態を観察や聴き取り調査によって詳細に調べた研究が目立っていた。

富田ゼミでは、例年どおり多様なテーマが取り上げられたが、そのなかで黒川菜月「適応指導教室にお





した労作である。それ以外でも、データを出るだけ多く収集し、時間の許す限り分析を行った研究が多く、これらの研究姿勢を高く評価したい。

(舛田 弘子)

文化領域

文化領域では以下の十名が、先行研究的確かな把握、独自の調査によるデータに基づく考察などの点で、特に高い評価を受けた。賀久萌美、日本列島北部の中世都市・城郭」は、青森県黒島城址の発掘成果に基づき他の遺跡との比較検討からその性格を考察した。清水絵理香「浄土庭園の成立と展開」は、発掘資料や測量図面を用い、平安時代に盛行した浄土庭園の成立過程を方位概念から考察した。菅原健太「白気道の指導について」は実験結果に基づきながら、画像を用いた客観的な指導が上達に効果的であることを明らかにした。橋場由紀「胆振地方の鳥居は、胆振地方の鳥居を型式や社殿との対応などに基づいて整理し、地域・時期的な傾向や特徴を明らかにした。

思想領域

今年度の思想領域の卒論は、杉山ゼミ八本、奥谷ゼミ六本、川合ゼミ七本、合計二三本であった。

杉山ゼミでは、川村舞子「刑法三九条について」と岸川さやか「人は嘘なしでは生きられないか」という二論文が、高い評価を得た。川村の論文は、心神喪失者の犯罪行為を罰しないなどを規定した法律を批判的に論じたものだが、その結論には疑念があるにもかかわらず、周到で緻密な論理的展開が評価された。岸川の論文は嘘の人間学とも言えるべき総合的研究であった。その他に、柴田美沙季「代理母出産について」、南葉桃江「オカミ再導入問題を考える」などの好論文があった。

奥谷ゼミの卒論は、提出六人中、四人がA評価という密度の濃さであった。天羽孝行「論語」と孔子、

そして日本」は、四百字原稿用紙で三百枚という大作であり、孔子の思想と「論語」を縦横に考察した最高の卒論であった。滝口由美「日本農業の再生に向けて」も、江戸時代から現在までの日本農業の歩みと問題点をまとめた力作であった。山村美佳「食品添加物」も資料を丹念に調べ、田中成佳「熊野古道と世界遺産登録の意義」も出身地和歌山の世界遺産とそのワイズユースを考察した好論文であった。

川合ゼミでは富田彩子「福井晴敏作品から見る『家族』のあり方」は自衛隊や警察などの特殊な社会の中で生きる人間像を作品を丹念に解読して、家族的な絆の存在を論じて、高い評価を得た。角田智洋「夢野久作 ドグラ・マグラ」に対する一考察「は難解な作品に真正面から取り組み、伊勢淳一「紫色を論じ」も高貴な色とされる紫の歴史を論じ、ともに意欲作であるが、今一歩踏み込みがあればと惜しまれた。

(川合増太郎)

英語英米文学科

英語英米文学科では卒論は必修ではないが、平成十九年度は五篇の提出があった。川瀬ゼミから二篇、グロースゼミから一篇、宮町ゼミから二篇であった。それぞれの卒論についてそのテーマと内容について簡単に紹介しておきたい。

柴田芳伸(川瀬ゼミ)は「ユダヤ民族の離散の要因」というタイトルを掲げ、ユダヤ教における「約束の地」の意味を考察し、「離散の民」と呼ばれるようになった起源を辿り、離散の要因を論じている。結論で述べられているように、「ユダヤ民族の離散の要因を探ることによっ

て、世界に目を向けるきっかけとなった」ことは、欧米の文学を研究するものにとつて共有する貴重な視点である。「ユダヤ民族の葛藤」と題した谷由香(川瀬ゼミ)の卒論では、ユダヤ人の民族的背景、ユダヤ人迫害の歴史的背景を簡潔に辿った後で、作品「屋根の上のヴァイオリン弾き」における自由恋愛のテーマを論じながら、当時のユダヤ人迫害の問題に言及している。原文を丹念に読んだ研究を通して、本人が述べているように、「彼らの背景には民族としての痛みがあると思う」という共感意識に到達したことは、文学研究のひとつの成果として評価したい。

奥山聡太(グロースゼミ)は「日本における英語学習法」個人的な探求の旅」というタイトルで、英文で書かれた唯一の卒論であった。クラッシュの外国語修得理論に基づき、これまで出会った英語教材や英語教授法を具体的に再評価している。最終的には、その理論の有効性を彼独自の視点から肯定している。奥山君の英文は簡潔で論理的であり、非常に説得力溢れる作品となっている。

櫻岡保佳(宮町ゼミ)は「無垢と経験の世界の相互依存性、土くれと小石の愛の姿を通して」の中で、英国詩人ウィリアム・ブレイクの愛の概念に「土くれと小石」、病めるバラ」の作品分析を通して迫っている。十八世紀後半のロンドンの社会的背景を踏まえながら独自に見解を論証しようとした労作と言える。千葉良臣(宮町ゼミ)はWilliam Blakeの『The Songs of Innocence and of Experience』の時代背景とその作品との関連についての中で、ブレイクの生涯と産業革命さなかのロンドン状況を辿り、その社会的背景とブ

臨床心理学科

臨床心理学科二〇〇七年度卒業論文発表会が二〇〇八年二月十三日(水)に行われた。登録者数四〇名のうち提出された卒業論文は二二編で、研究生二名の研究発表を加えて二四件の発表が二会場に分けて実施された。

卒業論文で扱われたテーマは、臨床心理学科の学生の多様な興味・関心を反映して幅広く、心理査定に関するものや心理的介入技法に関するものから、文献的研究、フィールドワークに基づく研究、実証的な研究など多彩で、分析法についても事例研究や実験的研究、調査的研究、多変量解析などの統計的手法を駆使したもので実にバラエティに富んだものであった。

会場には刊行されたばかりの卒業報告集が用意されていたが、多くの発表者は追加資料を配布したり、パワーポイントを用いたプレゼンテーションを行ったりとそれぞれの発表者が事前にかんりの準備をして臨んでいた。

朝からの雪にもかかわらず、両会場を併せて、学科教員、学部生、大学院生など総勢八〇名ほどが参加しており、フロアからは教員だけでなく、学生からも質問やコメントがあり活発な討論が展開されたのが印象的であった。質疑応答に際しては、フロアからの手厳しい指摘に、緊張のあまり戸惑う発表者もみられたが、四年間の大学生活の集大成の発表であり、多くの発表者にとって貴重な体験となったようだ。

(田形 修一)

地域高齢者福祉の実践的課題

～フィールドワークでの経験から～

二〇〇七年春、私たち新田ゼミ三年生による高齢者の地域福祉実践の調査研究が始まりました。本ゼミは、独居高齢者を主たる対象者とし、家族形態の変化等で多様となった地域社会の役割について、自治会主導による各種活動に主体的に参加し、地域高齢者の日常生活における課題と、それに対して地域としてどのような福祉実践を行っているか、そしてその課題と効果とは何かをフィールドワークという形で実践的に学びます。



この活動は、二〇〇六年度の新田ゼミでの活動からの継続で、前年度の先輩たちは、自治会役員からの視点を重点においてフィールドワークをしていました。二〇〇七年度の活動では、役員からではなく、自治会行事の参加者（対象は独居高齢者及び高齢者のみの世帯）からの視点という、別の角度からの調査を実施しました。昨年度に引き続き、早苗自治会、大麻宮町公団自治会、錦町新生自治会、大麻高町第二自治会の四自治会の協力を得、自治会参加はもちろんのこと、行事の運営や会議への参加、また本ゼミでの最重要事項である参加者へのインタビュー調査を経てきました。自治会活動（愛のふれあい交流事業）にただ参加するのではなく、行事の企画・運営や各種会議への参加、インタビュー調査などを通して様々な方と交流し、地域

における高齢者福祉の真情と課題に対する理解を深めました。そしてそこから生まれた学生からの提言を、去る二月十五日、自治会役員の方々と社会福祉協議会の方々をお呼びし、報告会という形で発表しました。一年間の活動を通して感じたことは、今まで地域における福祉実践ということに目を向けて

こなかった私たちですが、今回のゼミでの経験から、地域の福祉的役割と、その課題と効果を肌で感じる事ができて、私たちがこれから成すべき役割というものを見つけ出すきっかけになったということです。（人間科学科四年 白井 洋輔）

シンガポールの街をジャランジャラン！

私達のゼミ旅行（二〇〇八年二月十二日～二月十六日）は、飛行機にもう少しで乗り遅れるというハプニングから始まりました。まさか客側の私達が空港側に怒られるとは思いません。若干肩身の狭い思いをしながら約七時間飛行機に揺られた。そして私達を迎えてくれたのは、シンガポールの夜景と五日間私達を案内してくださったガイドのジャックさんだった。

朝から気温の高い二日目。戦争記念公園を始め、セントアンドリュース教会やマライオン公園などの市内を観光した。特に国のシンボルでもあるマライオンは、想像以上の迫力に圧倒された。そして夕飯の屋台料

理では、果物の王様と言われるドリアンが異臭を放ちながら王様の風格を私達に見せつけた。三日目の自主研修では、ケールカーで海を渡り、シンガポールから五〇〇m程離れたセントーサ島へ行った。ここでは、ピンクのイルカに癒され、まるで海中散歩をしているようなアンダーウォーターワールドという水族館を堪能した。そして夜は、ナイトサファリで野生の動物を間近で観察し、ファイヤードンクショーでは、我らがS西君が披露され、舞台上上がり、半分命懸けの晴れ姿を披露した。四日目は国境越えの経験を兼ねて、マレーシアへ行った。短い時間ではあったが、民族舞

や王室の展示を見学した。そしてこの旅行で最大のハプニングと言っても過言ではない出来事がある。その日の夜に起こった。夜の市内を観光中、帰りのタクシィが捕まらず、タクシィ乗り場にいるにもかかわらず約一時間半タクシィを待ち続けた。手を挙げれば簡単に止まってくれる日本とは大違いだった。

こうして私達のゼミ旅行はハプニングだらけの旅だった。しかしそれがあったからこそ、私達の絆は深まり、一生の思い出の一つとなったのは間違いない。そして英語と中国語とマレー語が行き交うシンガポールへ、またいつかジャランジャラン（マレー語で「散歩する」）したい。（英語英米文学科四年 七尾有里沙）



や王室の展示を見学した。そしてこの旅行で最大のハプニングと言っても過言ではない出来事がある。その日の夜に起こった。夜の市内を観光中、帰りのタクシィが捕まらず、タクシィ乗り場にいるにもかかわらず約一時間半タクシィを待ち続けた。手を挙げれば簡単に止まってくれる日本とは大違いだった。

留研を終えて

例年より遅い春、桜の花いまだ満開に至らぬ京都に赴いたのは、昨年四月のことでした。今月一年間の留研を終えて戻って参りました。心良く送り出して下さった札幌学院大学ならびに教職員の皆様に、まずは深く感謝申し上げます。

留研先は京都大学大学院人間・環境学研究所。心理学では、まだまだ少数派である社会構成主義を学び、私の研究テーマである想起・記憶研究に活かし、その次のステップを模索することが目的でした。あてがわれた院生室の片隅の机に向かい、研究だけをしていればよい毎日、充実そのもの。活気あふれる院生やポストドクターたちには大いに刺激を受け、共同で学会発表をする機会にも恵まれました。

受け入れ先の杉万俊夫教授の研究室は、日常的に国内外の研究者たちが交差する場所。ゼミは発表も討論もすべて英語。この機にあらためて英語を学び直すそうと思いました。幾分英語に慣れてきたときに、海外の研究者と合同の研究会が開催され、発表の機会を頂きました。ひと

りの研究者が興味を持ってくれ、彼の示唆によって、いくつかの英文論文を出版することに。また懇意にしていた他大学の研究者たちとも緊密な研究交流を行ない、学会発表や本の出版という実を結びました。

この一年という期間については奇妙な時間感覚が残っています。札幌の時間軸に直交する異質な時間を生きてきたようでした。京都滞在は「あつという間」でもなく、「長い間」でもなく、「札幌に帰ってきて」「久しぶり」でもなく、時間の長短を超越したような不思議な感覚が残っています。しかし、昨年よりも早く咲き始めた桜との別れを惜しみながらの帰札と自分なりに積み上げた成果、そして教職員の皆さんの「おかえりなさい」の言葉は、確かに一年という時間の経過を実感させました。またお世話になります。これからもよろしく願います。

(人文学部臨床心理学科 森 直久)



二〇〇七年度／第二回

人文学部合同講演会

イスラームイスラーム教は世界でキリスト教につぐ数の人々が信仰する宗教である。誰であれ、イスラームに関する知識を得ようとするとな

現在の世界情勢を理解することはできない。日本国内でもムスリム(イスラーム教徒)の人口は増えつつある。日々の生活のなかにムスリムとの接点があることへの想像力は、学科を問わず人文学部のすべての学生に求められる。そこで二〇〇七年十一月二日に開催した第二回合同講演会では、日本ムスリム協会の副会長である有見次郎先生に「ムスリムの生活」という演題でご講演いただいた。有見先生は拓殖大学イスラーム研究センター客員教授でもあり、またNHKのBSでのアル・ジャジーラニュースの同時通訳を担当なさって



いる。当日はお忙しい日程のなかこの講演会のためだけに東京からおいでいただいた。お話はアラビア語での挨拶に始まり、イスラームが単なる宗教にとどまらず、ムスリムが守るべき法や規範までも神の意思によって定められたものであることの説明へと続いた。そして具体的なムスリムの人生や生活を紹介しながら、とくに非ムスリムの日本人が知っておくべきさまざまな点を指摘した。最後にはクルアーン(コーラ

ン)の朗唱の録音などもお聞かせいただいた。ご自身ムスリムである有見先生の直接の語りかけをとおして、学生諸君は右に述べた講演会のねらいをよく理解し、各自の知識と想像力を深める一つのきっかけを得たようであった。

(奥田 統巳)

卒業生の動向 大学院進学者および合格者(2008年度分)

氏名	学 科	卒業年	姓 類	進 学 先 及 び 合 格
金子 麻耶	人間科学科	2008年3月	舛田	文教大学大学院人間科学研究科臨床心理学専攻(修士課程) 進学
金子 麻耶	人間科学科	2008年3月	舛田	東京成徳大学大学院心理学研究科臨床心理学専攻(修士課程) 合格
白江 香澄	人間科学科	2008年3月	鈴木	北海道医療大学大学院看護福祉学研究科臨床心理学専攻(修士課程) 進学
滝口 由美	人間科学科	2008年3月	奥谷	札幌学院大学大学院地域社会マネジメント研究科地域社会マネジメント専攻(修士課程) 進学
常磐野 文子	臨床心理学科	2008年3月	葛西	札幌学院大学大学院臨床心理学研究科臨床心理学専攻(修士課程) 進学
徳田 朱莉	臨床心理学科	2008年3月	佐野	札幌学院大学大学院臨床心理学研究科臨床心理学専攻(修士課程) 進学
馬場 結香	臨床心理学科	2008年3月	橋本	札幌学院大学大学院臨床心理学研究科臨床心理学専攻(修士課程) 進学
増谷 彩	臨床心理学科	2008年3月	伊藤	札幌学院大学大学院臨床心理学研究科臨床心理学専攻(修士課程) 進学
山田 裕子	臨床心理学科	2008年3月	橋本	札幌学院大学大学院臨床心理学研究科臨床心理学専攻(修士課程) 進学

2007年度学部教員の人事・研究活動等

(10/154/1)

◎教員の異動

▼退職 (三月三十一日付)

Paul Gemmill (英語)

William Kay (英語)

David Fleener (英語)

▼採用 (四月一日付)

▲昇任 (四月一日付)

▲兼任 (四月一日付)

▲教授 渡辺 知樹 (コミュニケーション) 二ヶーションと子ども発達) 札幌幌南小学校校長

▲教授 寺沢英理子 (発達心理臨床) 一テール学院大学准教授

▲准教授 藤野 友紀 (発達心理) 北海道大学助教

▲教授 中野 英子 (精神保健福祉論) 財団法人北海道精神保健推進協会勤務

▲教授 中野 英子 (精神保健福祉論) 財団法人北海道精神保健推進協会勤務

▲講師 Martin Murphy (英語) 本学非常勤講師 他

▲講師 Joel Rian (英語) 長沼町教育委員会

▲講師 Kenay Friesen (英語) 北星学園大学非常勤講師 他

▲教授 井手 正吾 (准教授)

▲准教授 山添 秀剛 (講師)

▲長期在外研究員

▲岡崎 清 (〇七年十月一日)

▲橋本 忠行 (〇八年四月一日)

▲橋本 忠行 (〇八年四月一日)

▲海外出張

▲臼杵 勲 (〇八年二月二十七日)

▲内田 司 (〇八年一月二十五日)

▲内田 司 (〇八年一月二十五日)

▲内田 司 (〇八年一月二十五日)

▲内田 司 (〇八年一月二十五日)

▲内田 司 (〇八年一月二十五日)

▲内田 司 (〇八年一月二十五日)

▲内田 司 (〇八年一月二十五日)

▲内田 司 (〇八年一月二十五日)

▲内田 司 (〇八年一月二十五日)

▲内田 司 (〇八年一月二十五日)

▲内田 司 (〇八年一月二十五日)

▲内田 司 (〇八年一月二十五日)

▲内田 司 (〇八年一月二十五日)

▲内田 司 (〇八年一月二十五日)

▲内田 司 (〇八年一月二十五日)

▲内田 司 (〇八年一月二十五日)

▲内田 司 (〇八年一月二十五日)

▲内田 司 (〇八年一月二十五日)

▲内田 司 (〇八年一月二十五日)

▲内田 司 (〇八年一月二十五日)

▲内田 司 (〇八年一月二十五日)

▲内田 司 (〇八年一月二十五日)

▲内田 司 (〇八年一月二十五日)

▲内田 司 (〇八年一月二十五日)

▲内田 司 (〇八年一月二十五日)

▲内田 司 (〇八年一月二十五日)

▲内田 司 (〇八年一月二十五日)

▲内田 司 (〇八年一月二十五日)

▲内田 司 (〇八年一月二十五日)

▲内田 司 (〇八年一月二十五日)

▲内田 司 (〇八年一月二十五日)

▲内田 司 (〇八年一月二十五日)

▲内田 司 (〇八年一月二十五日)

▲内田 司 (〇八年一月二十五日)

▲内田 司 (〇八年一月二十五日)

▲内田 司 (〇八年一月二十五日)

▲内田 司 (〇八年一月二十五日)

▲内田 司 (〇八年一月二十五日)

▲内田 司 (〇八年一月二十五日)

▲内田 司 (〇八年一月二十五日)

▲内田 司 (〇八年一月二十五日)

▲内田 司 (〇八年一月二十五日)

▲内田 司 (〇八年一月二十五日)

▲内田 司 (〇八年一月二十五日)

▲内田 司 (〇八年一月二十五日)

▲内田 司 (〇八年一月二十五日)

▲内田 司 (〇八年一月二十五日)

▲内田 司 (〇八年一月二十五日)

▲内田 司 (〇八年一月二十五日)

▲内田 司 (〇八年一月二十五日)

▲内田 司 (〇八年一月二十五日)

▲内田 司 (〇八年一月二十五日)

▲内田 司 (〇八年一月二十五日)

▲内田 司 (〇八年一月二十五日)

▲内田 司 (〇八年一月二十五日)

▲内田 司 (〇八年一月二十五日)

▲内田 司 (〇八年一月二十五日)

▲内田 司 (〇八年一月二十五日)

▲内田 司 (〇八年一月二十五日)

▲内田 司 (〇八年一月二十五日)

▲内田 司 (〇八年一月二十五日)

▲内田 司 (〇八年一月二十五日)

▲内田 司 (〇八年一月二十五日)

▲内田 司 (〇八年一月二十五日)

▲内田 司 (〇八年一月二十五日)

▲内田 司 (〇八年一月二十五日)

▲内田 司 (〇八年一月二十五日)

▲内田 司 (〇八年一月二十五日)

▲内田 司 (〇八年一月二十五日)

▲内田 司 (〇八年一月二十五日)

▲内田 司 (〇八年一月二十五日)

▲内田 司 (〇八年一月二十五日)

▲内田 司 (〇八年一月二十五日)

▲内田 司 (〇八年一月二十五日)

▲内田 司 (〇八年一月二十五日)

▲内田 司 (〇八年一月二十五日)

▲内田 司 (〇八年一月二十五日)

▲内田 司 (〇八年一月二十五日)

▲内田 司 (〇八年一月二十五日)

▲内田 司 (〇八年一月二十五日)

▲内田 司 (〇八年一月二十五日)

▲内田 司 (〇八年一月二十五日)

▲内田 司 (〇八年一月二十五日)

▲内田 司 (〇八年一月二十五日)

▲内田 司 (〇八年一月二十五日)

▲内田 司 (〇八年一月二十五日)

▲内田 司 (〇八年一月二十五日)

▲内田 司 (〇八年一月二十五日)

▲内田 司 (〇八年一月二十五日)

▲内田 司 (〇八年一月二十五日)

▲内田 司 (〇八年一月二十五日)

▲内田 司 (〇八年一月二十五日)

▲内田 司 (〇八年一月二十五日)

▲内田 司 (〇八年一月二十五日)

▲内田 司 (〇八年一月二十五日)

▲内田 司 (〇八年一月二十五日)

▲内田 司 (〇八年一月二十五日)

▲内田 司 (〇八年一月二十五日)

▲内田 司 (〇八年一月二十五日)

▲内田 司 (〇八年一月二十五日)

▲内田 司 (〇八年一月二十五日)

▲内田 司 (〇八年一月二十五日)

▲内田 司 (〇八年一月二十五日)

▲内田 司 (〇八年一月二十五日)

▲内田 司 (〇八年一月二十五日)

▲内田 司 (〇八年一月二十五日)

▲内田 司 (〇八年一月二十五日)

▲内田 司 (〇八年一月二十五日)

▲内田 司 (〇八年一月二十五日)

▲内田 司 (〇八年一月二十五日)

▲内田 司 (〇八年一月二十五日)

▲内田 司 (〇八年一月二十五日)

▲内田 司 (〇八年一月二十五日)

▲内田 司 (〇八年一月二十五日)

▲内田 司 (〇八年一月二十五日)

▲内田 司 (〇八年一月二十五日)

▲内田 司 (〇八年一月二十五日)

▲内田 司 (〇八年一月二十五日)

▲内田 司 (〇八年一月二十五日)

▲内田 司 (〇八年一月二十五日)

▲内田 司 (〇八年一月二十五日)

▲内田 司 (〇八年一月二十五日)

▲内田 司 (〇八年一月二十五日)

▲内田 司 (〇八年一月二十五日)

▲内田 司 (〇八年一月二十五日)

▲内田 司 (〇八年一月二十五日)

▲内田 司 (〇八年一月二十五日)

▲内田 司 (〇八年一月二十五日)

編集後記

大学は生き残りをかけた厳しい状況にあります。しかし、活発な学部の活動、特に学生と院生を中心に紹介することができました。日ごろの研鑽の現われとして、臨床心理士資格試験や教員採用試験に合格者を出すこともできました。新しい学生と教員を向かえ、今年度も更なる成果を挙げられることを期待します。(編集委員長 小出 良幸)

◎研究助成

▲山越 康裕 (中国北方のモンゴル系危機言語の総合的記述と言語変容に関する研究) 代表 (日本学術振興会科学研究費補助金(スタートアップ)) 一三二万円

▲山越 康裕 (中国北方のモンゴル系危機言語の総合的記述と言語変容に関する研究) 代表 (日本学術振興会科学研究費補助金(スタートアップ)) 一三二万円

▲山越 康裕 (中国北方のモンゴル系危機言語の総合的記述と言語変容に関する研究) 代表 (日本学術振興会科学研究費補助金(スタートアップ)) 一三二万円

▲山越 康裕 (中国北方のモンゴル系危機言語の総合的記述と言語変容に関する研究) 代表 (日本学術振興会科学研究費補助金(スタートアップ)) 一三二万円

▲山越 康裕 (中国北方のモンゴル系危機言語の総合的記述と言語変容に関する研究) 代表 (日本学術振興会科学研究費補助金(スタートアップ)) 一三二万円

▲山越 康裕 (中国北方のモンゴル系危機言語の総合的記述と言語変容に関する研究) 代表 (日本学術振興会科学研究費補助金(スタートアップ)) 一三二万円

▲山越 康裕 (中国北方のモンゴル系危機言語の総合的記述と言語変容に関する研究) 代表 (日本学術振興会科学研究費補助金(スタートアップ)) 一三二万円

▲山越 康裕 (中国北方のモンゴル系危機言語の総合的記述と言語変容に関する研究) 代表 (日本学術振興会科学研究費補助金(スタートアップ)) 一三二万円

▲山越 康裕 (中国北方のモンゴル系危機言語の総合的記述と言語変容に関する研究) 代表 (日本学術振興会科学研究費補助金(スタートアップ)) 一三二万円

▲山越 康裕 (中国北方のモンゴル系危機言語の総合的記述と言語変容に関する研究) 代表 (日本学術振興会科学研究費補助金(スタートアップ)) 一三二万円

▲山越 康裕 (中国北方のモンゴル系危機言語の総合的記述と言語変容に関する研究) 代表 (日本学術振興会科学研究費補助金(スタートアップ)) 一三二万円

▲山越 康裕 (中国北方のモンゴル系危機言語の総合的記述と言語変容に関する研究) 代表 (日本学術振興会科学研究費補助金(スタートアップ)) 一三二万円

▲山越 康裕 (中国北方のモンゴル系危機言語の総合的記述と言語変容に関する研究) 代表 (日本学術振興会科学研究費補助金(スタートアップ)) 一三二万円

▲山越 康裕 (中国北方のモンゴル系危機言語の総合的記述と言語変容に関する研究) 代表 (日本学術振興会科学研究費補助金(スタートアップ)) 一三二万円

▲山越 康裕 (中国北方のモンゴル系危機言語の総合的記述と言語変容に関する研究) 代表 (日本学術振興会科学研究費補助金(スタートアップ)) 一三二万円

▲山越 康裕 (中国北方のモンゴル系危機言語の総合的記述と言語変容に関する研究) 代表 (日本学術振興会科学研究費補助金(スタートアップ)) 一三二万円

▲山越 康裕 (中国北方のモンゴル系危機言語の総合的記述と言語変容に関する研究) 代表 (日本学術振興会科学研究費補助金(スタートアップ)) 一三二万円

▲山越 康裕 (中国北方のモンゴル系危機言語の総合的記述と言語変容に関する研究) 代表 (日本学術振興会科学研究費補助金(スタートアップ)) 一三二万円

▲山越 康裕 (中国北方のモンゴル系危機言語の総合的記述と言語変容に関する研究) 代表 (日本学術振興会科学研究費補助金(スタートアップ)) 一三二万円

▲山越 康裕 (中国北方のモンゴル系危機言語の総合的記述と言語変容に関する研究) 代表 (日本学術振興会科学研究費補助金(スタートアップ)) 一三二万円

▲山越 康裕 (中国北方のモンゴル系危機言語の総合的記述と言語変容に関する研究) 代表 (日本学術振興会科学研究費補助金(スタートアップ)) 一三二万円